

次の文章は、明治時代に書かれた「吾輩は猫である」の一部です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

「ここまでのあらずじ」 吾輩は猫である。名前はまだない。笹原ささばらの中に捨てられた吾輩は、食べ物たべものを求めて忍び込んだある家に住み着くようになった。教師をしているその家の主人には様々な客があり、吾輩は、人間とは不思議なものだと思いつながら、主人や来客の姿を観察している。

こう暑くては猫といえどもやりきれない。皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだといギリスのシドニー・スミスとかいう人が苦しがつたという話があるが、たとい骨だけにならなくともいいから、せめてこの淡灰色の斑入りふいの毛衣だけはちよつと洗い張りでもするか、もしくは当分のうち質にでも入れたいような気がする。人間から見たら猫などは年が年じゅう同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて単純な無事な銭のかからない生涯を送つていられるように思われるかもしれないが、いくら猫だつて相応に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度ぐらいあびたくないこともないが、なにしろこの毛衣の上から湯を使った日にはかわかすのが容易なことでないから汗臭いのを我慢してこの年になるまで銭湯ののれんをくぐつたことはない。おりおりは団扇うちわでも使つてみようという気も起ころんではないが、とにかく握ることができないのだからしかたがない。それを思うと人間はぜいたくなものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ煮てみたり、焼いてみたり、酢に漬けてみたり、味噌みそをつけてみたり好んでよいな手数をかけてお互いに恐悦している。着物だつてそうだ。猫のように一年じゅう同じ物を着通せというのは、不完全に生まれついた彼らにとって、ちと無理かもしれんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載せて暮らさなくてもいいからだ。羊の御厄介になつたり、蚤のお世話になつたり、綿畑のお情けさえ受けるに至つてはぜいたくは無能の結果だと断言してもいいくらいだ。

(夏目漱石「吾輩は猫である」による。)

——線部「羊の御厄介になつたり、蚤のお世話になつたり、綿畑のお情けさえ受ける」とありますが、この部分は、人間が何をどうすることを表したのですか。十字以内で書きなさい。

【中学校国語B3の解答】

(正答の条件)			
次の条件を満たして解答している。			
① 人間が何をどうすることが分かるよう適切に書いている。			
② 十字以内で書いている。			
(正答例)			
・衣服を着ること		(7字)	
1	条件①、② を満たして解答しているもの	37.5 %	◎
2	条件① を満たし、条件② を満たさないで解答しているもの	0.0	
3	条件② を満たし、条件① を満たさないで解答しているもの	44.8	
4	上記以外の解答	0.1	
5	無解答	17.5	